



TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集 異文化理解の授業づくり

特集

巻頭エッセイ 英語 ―情熱とアイデンティティ―	別所哲也	01
異文化理解の授業を行うにあたって	酒井英樹	02
ユーモアで日本文化を発信し、モチベーションをあげる	大島希巳江	06
ニューズレターの発行 ―授業+αの異文化理解教育―	田嶋美砂子	08
Resolving the Culture Clash in the Team-taught Classroom	Robin Sakamoto	10

連載

英語教師のための基礎講座 授業マネジメントの勘どころ：話し方の勘どころ(2)	田邊祐司	12
評価クリニック 観点別評価 悩みの根っこ	根岸雅史	14
授業レポート コミュニケーション力を高める英語の授業(1)	林 秀樹	16
小学校英語 Just Now 外国語活動の時間はハッピータイム ―6年間で培う城南小学校の実践	常本公志	19
単語の文化的意味 85 you	森住 衛	21
Essay Situation Critical: A Native English Teachers' Role in Motivating Troubled Students	James Hershman	22
英語指導のスパイス 辞書って面白い ―早引き競争と公開ブレインストーミング	興津紀子	23
AROUND THE WORLD 北ゲルマン語を巡って [2]	森 信嘉	表紙裏
表紙写真について ジャカランダ ―初夏の訪れ―	田嶋美砂子	表紙裏

Vol.28

SUMMER 2014
SANSEIDO



AROUND THE WORLD
28

北ゲルマン語を巡って [2] フィヨルドと ノルウェー語

森 信嘉 Mori Nobuyoshi (東海大学)

「フィヨルド (fjord)」は古ノルド語から英語に入った語である。ノルウェーは無数のフィヨルド、山、渓谷、森林等、雄大な自然美で名を馳せている。国全体が風光明媚な国立公園であるかのようだ。しかし、このような地形のために各地にちらばる集落どうしが分断され、集落間の移動は容易ではなかった。その結果、ノルウェーでは各地域の方言が保持され、多様で豊かな方言に満ちた言語社会が形成されることになった。北ゲルマン語の中でもノルウェー語の方言の多様さは群を抜いている。主要な方言として、北ノルウェー語方言、トロンネラーク方言、西ノルウェー語方言、東ノルウェー語方言の4種類、あるいはこれに中部ノルウェー方言を加えた5種類に分類されるのが一般的であるが、これらの主要方言にはさらに下位区分される数多くの方言が存在する。

ノルウェーは14世紀末からデンマークの支配下にあったため、書き言葉としてデンマーク語が用いられていた。1814年のデンマークからの独立を契機として、ノルウェー独自の書き言葉を確立しようとする動きが見られるようになる。その結果、デンマーク語の書き言葉にノルウェーの話し言葉の要素を加えて成立した「ブークモール (bokmål)」とノルウェー諸方言や古ノルド語を基盤として作られた人工語である「ニューノシュク (nynorsk)」の二種類がノルウェーにおける書き言葉として併用されるようになった。



フィヨルドー 新世界への旅立ち?

集落を隔離し方言の多様性に寄与したフィヨルドであるが、かつてはフィヨルドこそが船による集落間の移動を可能にし、集落どうしを結びつけていたとも考えられる。fjordの語源はドイツ語のfahren「行く」、英語のfare「運賃」、firth「湾」、ford「浅瀬」、port「港」などの語と関連があり、すべて何らかの意味で「移動」に関連する語である。これらの語には原始印欧語 *per「対岸に渡す」が含まれており、我が国でもおなじみの「般若波羅密多心経 (略称「般若心経」)」の「波羅密多」(サンスクリット語: paramita)の部分に「彼岸」を意味するparaという語の変化形が見られる。

腹の底から声を出すようにして経を読むと立派な呼吸法になるとのことで、居酒屋のカウンターに座り、一杯傾けながら「般若心経」梵語バージョンを暗記したことがある。訳の分からない文字が並んだ紙片を片手にぶつぶつ言っている親爺が敬遠されるのもわからなくはない。お陰様で、周りの席は静寂に満ちたフィヨルドの佇まいのようにひっそりと空席になることが多かった。

表紙写真
について

ジャカランダー初夏の訪れー

田嶋美砂子 (元星美学園中学校・高等学校, シドニー在住)

シドニーの10月はジャカランダの季節だ。この花木はオーストラリア固有の種ではないが、街の至るところで目にすることができ、花が咲き始めると、「シドニーに初夏がやって来た」としみじみ感じ入る。それは4月に日本で桜を見て、春を実感する感覚と非常によく似ている。

ジャカランダの楽しみ方はさまざま。木の真下から見上げれば、からっとした青空によく映える薄紫色の房を間近で愛でることができるし、公園の木立を遠目に見れば、周囲の新緑とのコントラストを堪能す

ることができる。散った花びらさえ、美しい。シドニーで育った友人の一人は幼少の頃、ジャカランダの落花をバスケット一杯に集めて遊んだという。しかし、花にはwaspと呼ばれるスズメバチが集まるそうなので、「手に取るときは気をつけるように」との助言も受けた。

ところで、ジャカランダはシドニーだけのものではない。ブリズベンやパースにも存在する。特に、シドニーから北に約660キロメートル離れたグラフトンが有名で、この街では毎年10月中旬から11月初旬に



かけて、ジャカランダ祭りが開かれる。専用ウェブサイトによると、約2週間の開催期間中には、山車の行進や舞踏会、ジョギング大会や各種チャリティー・イベントと、実に多くの催し物が企画されるという。

1934年に始まり、オーストラリアでは歴史ある民間祭事の1つとされるグラフトンのジャカランダ祭り。今年は80回目を迎える。シドニーからは列車で10時間以上かかるが、この記念すべき年に訪れ、地元の人々が誇る並木通りを歩いてみたいという誘惑にかられている。



英語

— 情熱とアイデンティティー —

別所 哲也 Bessho Tetsuya

英語との出会いは小学校時代。ある日、自宅で一本のカセットテープを見つけた。叔父が忘れて行った英検受験用のテープだった。宝物を見つけた気分になり、カセットレコーダーから英語が流れてきた瞬間に感じた不思議な感覚は今でも覚えている。

自分とは違う言葉を使っている国がある、海外に行ってみよう！憧れは膨らみ、「留学をしたい。」と両親に伝えた。すると「その夢は自分の力で叶えなさい！」との返事。当時はどうして支援してくれないんだ！と納得がいかなかったが、今にして思えば、この時「いつか絶対に英語をしっかり勉強してアメリカに行ってみよう！」と心に決めたように思う。夢の実現は、どんな困難の前でもそのモチベーションが色あせないことが重要だ。応援支援することと、一人一人のココロの中にやる気・情熱の光を灯してあげることは別物。夢や目標に向かうのは、その人自身の中にある情熱の光。その光を絶やさないと。周りはそれをどうサポートできるか、なのだ。

慶應義塾大学に入り、芝居を通して英語に触れる英語劇サークルに入部を決めた。英語への情熱が演劇に化学反応していった。大学3年の時、俳優を志すことに決めた。英語は道具、その向こう側にある「何か」に情熱が持てなければ持続しない。当時、日米合作映画のオーディションがあり参加。何度も行われるオーディションを通過しハリウッド映画「クライシス 2050」に出演決定。念願の初海外が仕事での渡米となったのだ。憧れのハリウッド、ロサンゼルスでの生活。しかし夢のような生活は、早々に行き詰った。英語はかなりの鍛錬を積んできたつもりだったが、耳がロックしてしまう。現地の出演者・スタッフの話すネイティブイングリッシュが全く理解できない。撮影だけは台本を頼りになん

とか付いていけたが、それ以外のコミュニケーションを取る事が減っていく。日本人スタッフがほとんどいない環境もあって、とてつもない孤独の中で感じた「自分は何者か？ そうだ“日本人”だ。」という思い。そして「英語はセカンドランゲージ。完璧を目指すのは辞めよう。失敗したっていいじゃないか！」と開き直った。するとどんどん英語がわかるようになった。耳のロックは、心のロックだったのだ。それはまさしく日本人としてのアイデンティティーに悩み、そのアイデンティティーに救われた瞬間だった。アイデンティティー・クライシスに向き合う時間が、英語という母語ではない言葉と向き合う時間でもあった。帰国後は、英語を話せる事で様々な国の人たちと交流する事ができ、ライフワークとしている国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル」を15年続けられている。

初めて本格的に英語に触れる子供たちにとって、その出会いが好奇心と驚きに満ちたものであり、英語の向こう側に「情熱を持てる何か」と出会えたらと願う。先生方にはその情熱を共有し、海外の価値観や文化と出会うことで自分自身のアイデンティティーと向き合う時間を生徒たちと分かち合ってもらいたい。結局のところ言葉も文化もそこにいるヒトとどう向き合うかだ。英語という言葉は、扉の向こうに入っていくための“鍵”なのだ。鍵の先にある情熱の泉を目指してほしい。それこそが語学習得のショートカットに他ならない。

べっしょ てつや

静岡県出身。慶應義塾大学卒業。90年、映画「クライシス 2050」でハリウッドデビュー後、映画・ドラマ・舞台・ラジオなどで幅広く活躍。99年より、日本発の国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル」を主宰。6月13日より、天王洲・銀河劇場にて、ミュージカル「カルメン」に出演予定。

異文化理解の授業を行うにあたって

酒井英樹

(信州大学)

1. はじめに

本稿では、英語科において異文化理解を扱う際に心がけたいことを整理します。異文化理解において、認知（文化に関する知識を身につけること）、情意（異文化に対して関心を寄せたり、感情を持ったりすること）、行動（異文化間コミュニケーションを行うこと）の3側面が大切であると言われています。この3側面に沿って、何を扱うか、どう受け止めさせるか、どう関わらせるか、について考えます。

2. 何を扱うか

(1) 教材の選択

学習指導要領では、英語科の教材の選択について「英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」としています。

ここでいう「英語を使用している人々を中心とする世界の人々」は、英語を母語として使用する人々、英語を第二言語として使用する人々、英語を外国語として学ぶ人々の3種類に大きく分けることができます。「国際共通語としての英語」という点から考えると、取り上げる文化は、英語を母語とする国や地域だけでなく、第二言語として使用したり、外国語として学ぶ国や地域にも目を向ける必要があります。

しかし、中学校の英語授業で世界のすべての国や地域の文化について取り上げることは不可能なので、特定の言語と文化を扱う際でも、他の言語や文

化への関心を持てるようにするとよいと思います。

また、文化には、食べ物、服装、工芸品、踊り、祭りなど目に見えるものから、風習、生活様式、制度など目に見えにくいもの、そして、考え方や思いなど目に見えないものまでが含まれています。「見える文化」を通して、そこで生活をしている（生活をしてきた）人々の思考や情意（見えない文化）に注意を向けられるとよいでしょう。

(2) NEW CROWN (以下 NC) で扱われている題材さて、NC ではどのような題材が扱われているのでしょうか。題材の中から、文化に関する主なものを選んで次の表のように整理してみました。

表1 NCで扱われている主な題材

その国・地域の英語の位置付け	見える文化	見えにくい文化・見えない文化
母語	1-6 イギリス、バグパイブ	1-8 アメリカ、学校生活 2-1 ハワイ、フラ 2-6 オーストラリア、先住民の歴史 3-6 アメリカ、人権運動
第二言語	2-8 インド、紙幣	2-8 インド、映画・言語
外国語		3-2 フィンランド、森との生活

1年生から3年生まで、基本的には、次のような広がりを見せています。

英語を母語として使用する国や地域の文化
(イギリス, アメリカ, オーストラリア)



英語を第二言語として使用する国や地域の文化
(インド)



英語を外国語として学ぶ国や地域の文化
(フィンランド)

また、扱われている文化については、次のように配列されています。

見える文化(例 バグパイプ, 紙幣)



見えにくい文化・見えない文化
(例 生活様式, 考え方など)

生徒の発達段階に応じて、扱う題材も少しずつ深みを増すように配列されています。ALTの出身国・地域の文化など、教科書以外の題材を授業に取り入れるときも、こういったことを考慮しつつ、生徒の興味・関心に合ったものを選ぶとよいでしょう。

(3) コミュニケーションに役立つ文化の理解

英語科で異文化理解を扱う際に注意したいことは、授業の中で指導し、理解したかどうかの評価の対象になるものと、題材として扱うが、必ずしも習得を目指さなくてもよいものがあるということです。

前者は、外国語科の目標の中にある「言語や文化に対する理解」の「文化」であり、「言語や文化についての知識・理解」という評価の観点によって評価の対象となるものです。「コミュニケーションに役立つ文化の理解」と言うこともできます。「言語や文化についての知識・理解」の評価の観点について、「一般常識的な知識や百科事典のような内容ではなく、技能の運用で求められる、言語の背景にある文化に限って評価する。すなわち、理解をしていないとコミュニケーションに支障をきたすような文化的背景を評価の対象とする。」(下線筆者, 国立教育政策研究所, 2011, p.34)とされています。これらにはメールや手紙の書き方, 日付の表現方法, 姓名の言い方, コミュニケーションのマナーなどが含まれる

と考えます。

一方で、NC Book 2のLesson 8でインドの文化について扱っているような、「インドの方がハリウッドより映画制作数が多い」という知識は、コミュニケーションに支障をきたす類の情報ではありませんので、評価の対象とはなりません。

3. どう受け止めさせるか

(1) 多様なものの見方や考え方

異文化理解をねらいの1つとした授業では、さまざまな文化に関する情報を得るだけでなく、文化について考えたり、判断を行ったりしながら、多様なものの見方や考え方を受け入れられる態度を育てたいものです。英語科においては、英語を使って、聞いたり話したり読んだり書いたりします。これらはその背景にある、思考・判断を表現するという認知行為に他なりません。思考力・判断力・表現力は、学力の3要素、すなわち①基礎的・基本的な知識及び技能、②知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等、③主体的に学習に取り組む態度、のうちの②にあたるものです(学校教育法第49条)。

これを異文化理解の点から考えると、英語科において育てたい思考力や判断力、表現力に重なることに気がつきます。つまり、異文化を理解しようとする際、自文化の視点だけでは、誤解や偏見の気持が生じる可能性があります。まず自らの考え方や見方が自分の背景にある文化に影響されていることを意識し、相手の視点に立って考えるという、批判的で柔軟な思考力・判断力を持つことが重要なのです。このように考えると、多様なものの見方や考え方を受け入れる態度を育てるためには、次のような力をつけさせることが必要と考えられます。

- ① 自分の見方や考え方を批判的に捉えるために、自分の見方や考え方を理由とともに表現すること
- ② 異なるものに対して柔軟に応答するために、多様なものの見方や考え方をもちながら考えたり、判断したりすること

(2) 指導例

Uluru に関するレッスンの例を取り上げて、もう少し具体的に説明しましょう。(NC Book 2 Lesson 6, Use Read)。第一段落では、(自分たちを含む)多くの人々が、どのように Ayers Rock (Uluru) を見ているのかが書かれています。

Ayers Rock is a famous place in Australia. (中略) Every year, 350,000 people visit the rock. Ayers Rock is just a place to visit to these people.

ステップ1: 自分たちの見方や考え方を意識する

Ayers Rock の写真を見せて、“How do you like Ayers Rock?” “Do you want to visit Ayers Rock too? Why?” などと質問し、自分の見方や考え方を理由とともに表現させます。生徒からは、観光客の視点から述べられた、次のような回答が返ってくるでしょう。

回答例:

- ・I want to visit the rock because it is beautiful.
- ・It is very big. I want to look around at the top of the rock. I think we can enjoy the view.

ステップ2: 相手の視点に立って考える

次に、Uluru 周辺の先住民であるアナングの人々たちの視点に立って考えるように促します。“The native people, the Anangu, live near the rock. Let’s think about their feelings toward the rock.” と言ってから、“Do the Anangu think it is beautiful?” “Do the Anangu enjoy looking around at the top of the rock?” など、生徒の回答を取り入れながら質問します。つまり、自分たちと同じようにアナングの人々は考えているのだろうかかと生徒に問いかけ、意識をアナングの人々に向けさせます。

第二段落では一転して、アナングの人々の視点で書かれています。そこで、次のような英文を生徒に渡し、空欄に入る語句を考えさせます。

The rock is a/an [] place to the native people, the Anangu. They have their own name for it, Uluru. They started to live near the rock over 40,000 years ago. They deeply respect the rock and everything around it.

2文目からの内容を考えて、先住民の思いに立つように促します。多様なものの見方や考え方を持ちながら考えたり、判断したりするものを経験させるのです。次は、空欄に入る語句とその理由の例です。

回答例:

- ・important…アナングの人々は、岩に独自の名前をつけているぐらい、大切にしているから。
- ・precious や special…岩と共に住んできて、昔から敬っていることから、アナングの人々にとって特別なものであることがわかるから。

同じものでも、文化的背景によって異なって見えている場合があります。Ayers Rock/Uluru に対する異なる視点を題材に、ものの見方や考え方の多様性を意識させていきたいものです。

(3) ALT とのチーム・ティーチング

ALT とのチーム・ティーチングは、異文化理解の授業を行う絶好の機会です。ALT の役割の1つとして ALT の言語・文化に関する情報提供が挙げられます。特に、ALT は見える文化の紹介だけでなく、見えにくい文化・見えない文化まで掘り下げて説明できます。どのような行動をとるか、どんな考え方をするか、どのように感じるかというような質問をし、ALT に答えてもらうとよいでしょう。

例えば、NC Book 1 の Lesson 8 では、アメリカの学校生活が扱われています。そこで、アメリカ出身の先生に次のような質問をしてみました。() で示した回答を見ると、教科書に書かれていない情報を得ることができます。

Q1: Did you eat lunch in a school cafeteria?
(Yes.)

Q2: What is served at a school cafeteria? (It depends on whether it's an elementary school or JHS/HS. Main choices for the day or a la carte.)

Q3: Did you eat lunch in a cafeteria, buy lunch, or bring lunch from home? (We always ate in the lunch room/cafeteria. We "bought" or "brought" depending on the weekly menu.)

さらに、Which did you like main choices for the day or a la carte? Why? と尋ねてみれば、ALTの「ものの見方や考え方」を生徒に紹介することができます。

4. どう関わらせるか

教室内で学んだことを活かして、外の世界とつながることも重要です。異なる背景を持つ人々と交流する中で、その文化に関する知識を得、多様なものの見方・考え方ができるようになっていくことでしょう。ICT活用の機会が増え、10年前と比べて活動が工夫しやすくなっているといえます。

(1) ICT 機器を持って教室の外へ

デジタルカメラ、ビデオカメラ、タブレット型コンピュータ、ノート型コンピュータなど、運びやすい機器が利用可能となっています。生徒に持たせて、教室外で活動させ、教室で報告させるという活動を実施してはいかがでしょうか。

例えば、NC Book 3のLesson 3 USE Mini-projectには、「先生にインタビュー」という活動があります。このような活動の際には、ICT機器を生徒に持たせ、インタビューの様子を録画させます。教室に戻ってきてから、録画した映像を見ながら生徒同士でインタビューの様子を報告させるとよいでしょう。音声だけではなく、相手や自分たちの表情やしぐさなども記録することができますので、やりとりに加えて、立ち振る舞いについても振り返らせることができます。

学校によって状況は異なると思いますが、ALTや他の英語の先生だけでなく、ALTの友人や、英

語を話す他教科の先生、地域に住んでいる人たちなど、インタビューの対象を広げるとよいと思います。

(2) ICT 機器を使った交流

ICT機器を使うと、オフラインとオンラインの両方の交流が可能となります。メールやビデオ・レターの交換など、送受信のタイミングが同時でなくてもよいオフラインの交流は、準備に時間をかけることができたり、繰り返し聞いたり読んだりすることで相手のメッセージが理解できたりするという利点があります。一方、テレビ電話などのオンラインの交流は、その場で考えて英語を話したり、相手の言うことを理解したりしなくてはならないため、難しくはありますが、相手とつながっている感覚を得ることができます。生徒や環境に応じて、交流の方法を選ぶことが重要です。

ある学校で、オンラインの交流活動を実施していました。そこでは、映像と音声だけでなく、絵が描けるソフトを同時に立ち上げていました。イラストを描きながらやりとりを行うことで、互いに意思をうまく伝達し合っていたようです。ICTの活用については、工夫の余地がたくさんあると思います。

(3) 交流する相手

異文化理解というと海外で暮らす人々との交流を思い浮かべがちですが、ALTとの関わりも大切にしたいものです。一緒に給食を食べたり、調理実習をしたり、遠足や修学旅行に行ったりして、授業内外で活動する機会を増やすとよいと思います。

また、自分以外の級友、教師と交流する際にも、「相手を尊重し、理解し、行動する」という異文化理解の基本姿勢が必要となります。先述したインタビュー活動は、場合によっては、他のクラスの生徒や、他学年の生徒を対象にしてもよいと思います。クラス内・クラス間での交流、学年間での交流、学校内での交流、地域内での交流というように、足元の異文化理解を大切にしたいものです。

【引用文献】

国立教育政策研究所 (2011). 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 (中学校 外国語)』

特集 異文化理解の授業づくり

ユーモアで日本文化を発信し、
モチベーションをあげる

大島希巳江

(文京学院大学)

1. ジョークや小噺に表現される文化

ユーモア学では、ジョークの役割の1つを次のように考えています。「ジョークは社会(特定の文化圏)で何が起きているのかを測定し、記録し、示唆する社会の温度計である(Davies, 1990)。」つまり、笑い話には、その時代に起きている事柄や人々の生活習慣、思想が現れているということです。

たとえば、世界で最も多いといわれるユダヤジョークにはこんなものがあります。「ヒトラーが有名な占い師に『私はいつ死ぬだろうか』と聞いたところ、占い師は『ユダヤ人の祝日にお亡くなりになります』と答えました。そこでヒトラーはユダヤ人の祝日に特別警護を増やしました。ところが占い師は『そんなことをしても無駄です。いつお亡くなりになっても、その日がユダヤ人の祝日になります。』」このジョークは、ヒトラーに迫害されたユダヤ人の悲劇的な歴史を表現しています。このようなジョークの裏には、それぞれの文化の歴史や人々の思想が見え隠れしています。世界のジョークから世界の文化や事情を学ぶという学習方法があるほどです。

日本の小噺や笑い噺も同様です。「すし屋で客が言いました。『すみません、このエビ、なんだかおいしくないんですが。2週間前に来たときはすごくおいしかったのに。』すし職人『おかしいですね。同じ日に仕入れた同じエビなんです。』」すしネタは新鮮でなければならない、という食文化が表れています。日本人の食材へのこだわりがわかる噺です。

もちろん、言語も含め、その文化について熟知していなければわからない、笑えないものも多いのがジョーク・小噺です。海外のジョークが今ひとつおもしろくないと感じることがあるとしたら、それは

文化差からくるものがほとんどです。

また、単語やフレーズのダブルミーニングを使ったシャレなどは日本語にもありますが、翻訳もしづらく、それほど爆笑するようなものでもありません。英語のそれも同様で、それほど笑えないかもしれませんが、語学学習の教材としては有効です。「A man called an airline company and asked. 'Excuse me, how long does it take to fly from Tokyo to Honolulu?' The operator said, 'Oh, just a minute.' The man said, 'Wow! Really? That fast? Thank you!' He hanged up.」このジョークの just a minute (ほんの1分/少々お待ちください)のダブルミーニングが理解できれば、これは長期的な記憶に残ります。

2. ユーモアの効用

異文化理解の教材として、ユーモアは非常に有効といえます。笑いは異文化に対して否定的な拒否反応を抑え、好意的に受け入れる寛容な環境を作ってくれるからです。題材がおもしろいことで、生徒は題材や英語に対して好意と興味を持ってくれるというメリットがあります。そして、そのおもしろい題材を提供してくれた教員にも好意と興味を持ちます。ユーモアはより良い人間関係を築くのに大きな役割を果たすので、生徒と教員が一緒に笑うということは、異文化の持ち主同士の絆として重要です。

また、おもしろい噺は記憶に残りやすいということもわかっています。おもしろい噺を聞くと、それを人に話したくなるので、聞く(input)、話す(output)のプロセスが自然とできるわけです。そのため、英語に限らず、おもしろい噺は長期的な記憶に残る傾向があります。笑い噺だと前置きすると、

生徒たちは一緒に笑いたい、聞き逃して自分だけが笑えなかったでしょう、という気持ちから、いつも以上の集中力を発揮して一生懸命聞いてくれます。噺の内容に伴って、覚えた英語についても長期的な記憶が期待できます。世界の文化を英語のジョークを通して覚えることにより、異文化理解と英語の両方を楽しみながら学習することが可能です。

3. 日本文化を発信する

受信という意味では世界のジョークは良い題材といえますが、発信となると、やはり日本人である限りは日本文化を発信できる小噺が良いと思います。英語を話す日本人に世界が期待することは、日本について英語で説明できることです。意外に知られていない日本文化を見直し、再発見し、英語で話せるようになると、真の国際人・グローバル人材に近づけます。ユーモアの発信は相手との友好関係を築くのにも有効ですから、やはり日本人も日本のユーモアを発信して異文化交流に貢献したいものです。

たとえば、古典的な小噺にこんなものがあります。

A Japanese and a foreigner were talking.
 'Hi, teach me a Japanese word!'
 'OK, how about *arigato*. It means thank you.'
 'Ari..., Aga...to..., oh, it's difficult.'
 'Well, then remember it as alligator.
Arigato, alligator, *arigato*, alligator..., they sound close.'

Next day, the Japanese said, 'Hi, I'll buy you a cup of tea. It's on me.'

'Oh, ah..., crocodile!'

この小噺の良いところは、これを聞いた外国人は間違いなく日本語の「ありがとう」という言葉を覚えてくれるという点です。笑いながらも、これくらいはちゃんと覚えておかないとまずいな、という気持ちになるのでしょうか。このような小噺を、最初はペアワークとして、2人一組で覚えて演じてみるとよいと思います。ナレーションを1人入れてもよいでしょう。どの役をやるか、どのようなジェスチャーや顔の表情でやるか、声の大きさやトーンはどうすればおもしろいのか、などを話し合いながら繰り返し練習し、さらに発表する場があると、楽し

みながら学習できるのではないのでしょうか。

もっと短い噺もあります。

'Hi, Toku. How is the bookshelf I built for you the other day?'

'Oh, it's broken already. It was no good.'

'What? You didn't put anything on it, did you?'

腕の悪い大工さんの噺ですが、これなども2人一組で練習すると楽しくできます。

小噺の他にも、落語には、そばをズルズルと食べる噺、幽霊が出てきて人気者になる噺、丁稚奉公の少年が失敗ばかりする噺、髪結いの亭主を支えるしっかり者のおかみさんの噺など、日本文化をたっぷり含んだ噺がたくさんあります。外国人には異文化である日本文化も、笑い噺であれば寛容に受け入れられ、理解されやすくなるので、小噺・落語は日本を発信するためのよい題材だといえるでしょう。

4. 異文化理解を学習する場

異文化理解や異文化交流の大切さについて学ぶ場は、やはり英語教育の授業が最適であろうと思います。英語で発信されている世界の様々な文化や価値観に対して、偏見を持たずに学び理解するという姿勢を育むことができ、また、日本文化を英語で表現することによって、英語圏から見た、異文化としての日本文化に気づくこともできます。将来、生徒たちが、身につけた英語を使って何を語り、何をするのかはわかりませんが、英語を使うということは、話す相手は日本人ではない可能性のほうが高いのです。英語圏の人とも限りません。どこの国の人でも、日本人である私たちはおそらく英語を使ってコミュニケーションするのです。ということは、英語で話すことは、必然的に異文化コミュニケーションをすることになります。それには、異文化理解は必要不可欠であり、スキルの1つであるとも言えます。そして、異文化間で一番大事なことは、友好関係を持つということです。これは目的がビジネスでも政治でも同じはずです。英語でコミュニケーションをする際には、ユーモアを少し意識して世界との友好関係を結べるとよいと思います。

【参考文献】

Davies, Christie (1997). *Ethnic Humor Around the World*, Indiana University Press.

特集 異文化理解の授業づくり

ニューズレターの発行 —授業+αの異文化理解教育—

田嶋美砂子

(元星美学園中学校・高等学校)

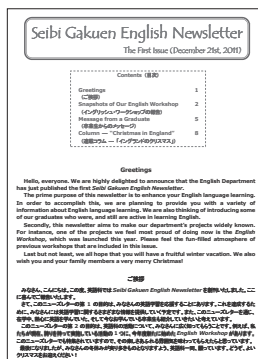
1. はじめに

経済のグローバル化とテクノロジーの発達により、人やモノが容易に移動する時代を私たちは生きています。日本で生まれたものの、生活の拠点は他国にあるという人々の存在は、もはや珍しくありません。海外からの居住者の増加により、日本社会そのものが以前よりもはるかに多文化・多言語状態になってきていると表現することもできるでしょう。

その一方、成育環境によっては、文化間・言語間の移動をほとんど経験しない人々がいます。元勤務校での体感からすると、日本の一般的な中学生の多くがそうであると言えるかもしれません。私はここに、学校現場、とりわけ外国語(英語)という教科における異文化理解教育の存在意義を見出します。授業内外での活動を通じて、それまで接することのなかった、自身のものとは異なる生活様式や習慣、考え方などについて学ぶ機会は、他者をよりよく理解しようとしたり、意見が相容れないときに、互いに歩み寄ろうとしたりする姿勢を培う一助となるのではないのでしょうか。本稿では、私が元勤務校で試みた異文化理解教育の実践について、ニューズレターの発行という観点から記したいと思います。

2. ニューズレター概略

英語科でニューズレターを発行する取り組みは、2つの目的を持って、2011年に始まりました。1つ目の目的は、英語学習に関する情報の掲載や教科で実施している行事の告知・報告を通じて、校内の英語教育活動を活性化させること、2つ目は、紙面上ではありますが、正規の授業以外の場で、異文化に触れる機会をできるだけ多く提供することです。



1回の分量は、A4サイズで8ページ。それを冊子にし、年に2~3度のペースで、中・高すべての生徒と教員に配付します。この冊子は、モノクロで印刷せざるを得ませんが、カラー版をPDFファイル

にし、学校のウェブサイト上でも閲覧できるようにしました。なお、このニューズレターでは、前述した2つ目の目的を果たすために、Column(連載コラム)とMessage from a Graduate(卒業生からのメッセージ)という2つのコーナーを設けています。

3. Column

このコーナーの担当者は、英国出身の教員です。使用言語は英語で、毎回300~400語程のエッセイを執筆してもらうようにしました。主なトピックは、彼の故郷イングランドでの季節の行事についてです。例えば、12月発行の創刊号では、“Christmas in England”というタイトルの下、クリスマスイブから当日に至るまでの様子を紹介しています。文中にある“... before bedtime some children help their parents set out mince pies and a drop of brandy for Santa when he comes to deliver presents.”という記述から、「深夜にやって来る(と信じられている)サンタクロースのために、ミンスパイとブランデーを用意する」というイングランドの習慣を初めて知った生徒もいたのではないのでしょうか。

翌年の2学期に発行した第3号では、タイトルを“The Summer Holiday in England”とし、学校の夏休みと家庭での過ごし方について紹介してもらいました。それを読むと、イングランドの学校では、夏休みが2か月もあること、クラブ活動はなく、休み中にまったく登校しないこと、夏でも日差しが少ないため、太陽の光を求めて、スペインに旅行する家族が多いことなどがわかります。生徒にとっては、日本で経験したばかりの自身の夏休みとの違いを学ぶよい機会になったように思います。

前述したエッセイの引用文からもわかるように、Columnでは、未習の単語や文法項目がしばしば使用されます。単語に関しては、注釈を付けるなどの手立てを施したときもありますが、文法項目を逐一解説するようなことはしていません。それは、このコーナーが異文化理解の促進とともに、オーセンティックな英文の読解に親しむ場でもあってほしいと考えたからです。

4. Message from a Graduate

イングランド事情に特化したColumnに加えて、Message from a Graduateでは、より広い意味での異文化理解を目標としています。このコーナーの頼もしい協力者は、外国語や海外に縁の深い卒業生です。彼女たちには、インタビューを通じて、自身の語学学習や他国での生活を振り返ってもらっています。それを読んだ在校生が英語や英語圏という枠を超え、ありとあらゆる言語や文化への理解を深めてくれたらと思います。スタートさせました。私自身は在職中、4人の卒業生にインタビューを試みましたが、その内容は、みなそれぞれに大変個性的です。

例えば、第3号に登場したMさんは、青年海外協力隊の一員として過ごしたコスタリカでの2年間について語っています。ご存知のように、コスタリカの公用語は、スペイン語です。インタビューでは、①スペイン語のABCは、「アー」「ベー」「セー」と読むこと、②単語の発音は、基本的にはローマ字読みでよいこと、③挨拶では、「そのまま」「自然に生きる」などの意味を持つpura vida(英語のpure lifeに相当)が用いられるといったようなことが話題になりました。

このニュースレターを発行した直後、中1では、School Life in the USA (NEW CROWN BOOK 1, LESSON 8)の学習が始まりました。USE-Readのトピックの1つは、アメリカ合衆国のスペイン語の授業です。ここでは、Mさんから教わった①～③を、生徒もすでに知っていると期待できる背景の情報として活用することができました。また、同じく中1の地理を担当していた同僚が中南米について導入する際、このインタビューに触れてくれたそうです。ニュースレター創刊時には想定していなかった出来事ですが、ささやかながらも、教科横断的な利用につながることができました。

さらに、Mさんがインタビュー後半で述べた内容が印象的です。コスタリカでの仕事を通じて学んだことを尋ねた際、彼女は次のように答えました。

世の中には本当にいろいろな人がいるということです。仕事をやるにしても、コスタリカにはコスタリカのやり方がある、それをこちら側が受け入れないと、進んでいきません。「これが正しい」と思い込んでいると、厳しいですね。少し話が大きくなりますが、お互いの違いを認められれば、それが最終的に世界平和へとつながっていくのではないかと。

Mさんのことばには、異文化理解教育の向かうべき方向性のヒントが凝縮されていると言えます。

5. 終わりに

「他とかかわる力」を教育目標の1つとするNEW CROWNでは、世界のさまざまな文化がとり上げられています。それらを上手に活用すれば、授業内で異文化理解の促進を図ることができます。しかし、ときには、本文を扱うだけで精一杯という課もあるでしょう。一方、ニュースレターは、授業の進度を妨げません。読む側も好きなときに、好きな場所で、好きなコーナーだけ眺めるといったことが可能です。

授業+αとしてのニュースレター。定期的な発行は、確かに大変な作業ですが、教科書を超えた事柄や英語以外の言語に触れる場を提供することができるという点で、ぜひお勧めしたい試みです。

Resolving the Culture Clash in the Team-taught Classroom

Robin Sakamoto

(Kyorin University)

It is no secret that we teach in the same manner that we learn best. If you pause a moment and recall your favorite teacher, you may find that you “teach” in much the same way. While this may work in your home country, it becomes slightly more difficult when you begin to teach abroad. This article will address the four main patterns found when an ALT teaches in a Japanese English classroom and offer suggestions and ideas for bridging the culture gap for both ALTs and Japanese teachers of English (JTEs).

1. Human Tape Recorder

This is by far the most frustrating situation but perhaps the most common pattern found when an ALT enters the Japanese classroom. The name says it all: the ALT is used like a tape recorder. The JTE will ask the ALT to read aloud and have the students repeat after the ALT. This approach is very interesting to me as I have studied three foreign languages in the US and I have no recollection of my teacher bringing a tape recorder into the classroom. The teacher was always the “authority” and taught using her/his own voice to read aloud. Compare this to a Japanese classroom. I think back to when I first started to study Japanese in an elementary school classroom. I was mesmerized by the teacher writing *kanji* on the board. We were all to follow her example exactly—there was a correct stroke order and way to write each *kanji*. If this approach is taken into the English language classroom, it would suggest that there is a “correct” way to pronounce or produce each and every

word. Hence this results in the need for a tape recorder. While it may be frustrating for an ALT to be used in such a manner, it may help for the ALT to realize that indeed they are fulfilling a very important role for a Japanese learner.

2. Paralysis

This is another situation in which neither the ALT nor the JTE know exactly what to do in the team-taught classroom. Oftentimes, the ALT has all good intentions but they haven’t really thought about what they are trying to teach. This confuses the JTE and places them in a rather difficult situation. They want the students to enjoy English, but they can’t see how what the ALT wants to do is related to the goals and objectives of the class. So they become like two separate teachers and not at all like a team. The ALT does a game or something and then the JTE does something completely differently. They both get frustrated and the “team” teaching does nothing but confuse the students. After living in Japan for some time and learning more about the guidelines established by the Ministry of Education and the pressure of examinations, the ALT will realize that they have to take into account the needs of the students more. Games can still be enjoyed, but if they are focused on lessons in the text using vocabulary and sentence patterns the students are already familiar with, the result will be much more satisfying. And in addition, the JTE will be able to communicate what they envision as the goal for a lesson and the “team” will move directly out of paralysis and into

productive team-teaching.

3. Culture Clash

I have always loved English and I remember my favorite teacher well. She would come into the classroom with a coffee cup in hand, sit on the desk and say to us, "OK class, what did you think about the reading?" We would then offer up our ideas one after the other in a very stimulating discussion. Can you imagine what happened when I tried to emulate her teaching style in Japan? Obviously it was a complete failure. Not only was it extremely rude to sit on a desk, the students couldn't tell me what they thought about the questions I asked. I couldn't help but wonder how the students acted in other classes and so I asked if I could observe some of their other subjects. What a learning opportunity this was for me! Observing other classes helped me to reduce the culture clash in my own classroom. Asking a student point blank, "So, what do you think?" is difficult on a variety of levels. The student is not used to answering such a question in their own native language and thus the task becomes twice as difficult. They are trying to adapt to a new mode of responding and that must take place in a second language. A very high order for a junior high school student! I also experienced this culture clash when I tried to study Japanese. I wanted to learn to speak but my teacher was set on my learning *hiragana*, *katakana* and *kanji*. I got very frustrated practicing the correct form for symbols and wanted to hurry up and get to "learning" Japanese. But in reality I was learning Japanese. I am certain my teacher was teaching me in the way they had learned Japanese and had I been more patient, perhaps my written Japanese today would be far better than it is today.

4. Synergy

This brings us to the fourth and best pattern for both teachers and students. It stems from an understanding of both

learning styles and teaching methods. It encourages the ALT to be creative and contributing in the classroom but within the structure and needs designated by a Japanese learner. What is exciting about this pattern is that it is dynamic. As the team-teachers work together they will begin to create something brand new—and this is what is meant by synergy. Synergy can easily be expressed in mathematical terms: $1 + 1 = 3$. This means that (1) the JTE has one mode of teaching which suits a Japanese learner. But the same can be true for (1) the ALT who has a different perspective on learning and uses a more hands-on or active learning approach. If the two team-teachers can combine these approaches, they will not only add value to each other ($1 + 1 = 2$), they will actually create a brand new entity making the equation into $1 + 1 = 3$. This should be the goal of team-teaching. So how can we bring synergy into the team-taught classroom? I think it begins with preparation and careful planning. The ALT can ask the JTE for guidance on vocabulary to highlight, new sentence patterns to implement and then incorporate these into an active learning activity. The JTE can provide feedback on the activity pointing out in particular what tasks may be difficult for a Japanese learner to perform. As the two teachers work together, they will begin to gain a deeper appreciation for each other's talents and be able to build upon these strengths in future lessons. The result is not only a well prepared lesson but also a united approach to teaching in the classroom. This will allow the Japanese learner to relax and look forward to team-taught lessons. Students will gain respect for their JTE as they can see the "correct" way to effectively communicate. The ALT will feel much more satisfaction when a lesson goes well and students become more confident in using their English. Not every lesson will be perfect, but when synergy is present, everyone benefits. Someday a student may even teach as they learned from you!

授業マネージメントの勘どころ： 話し方の勘どころ (2)

田邊 祐司 Tanabe Yuji
(専修大学)

1 はじめに

前回は、「授業以前」の話し方に関する勘どころをお伝えしました。ポイントは伝えようとする教師の信念と自信でした。今回は「授業内」へと少し駒を進め、話の構成に特化した熟練教師3人の勘どころを開陳します！

2 KISS

授業は、生徒の「知りたい」という好奇心を喚起する場であると考える3人は、この観点からそれぞれの話し方に細心の注意を払っているようです。一般に教師の話し方では、「①話の見取り図の先出し、②ナンバーリングとラベリング、③キーワードの繰り返し」などの指導技術がよく知られています(菊池, 2012)。

これらに加えて3人が常に意識しているのが、「KISS」という概念です。この言葉は、米国の旧ロッキード社傘下の軍用機を設計していたクラレンス・ケリー・ジョンソンに由来しますが、今では拡大解釈され、「Keep It Short and Simple」の意味合いで用いられています。教師の話し方の文脈で言えば、「話は簡潔かつ単純に、それも生徒の視線に寄り添いながら伝えるべきである」という意味になります。

これを座右の銘にしているA先生です。

こういう稼業をやっていると、小難しくモノを語ったり、専門用語を使ったりして、事をわざわざ複雑にして伝える術が身について…、いや、染みついてしまいます。一時は、そこから抜け出せなくなり、そんな自分がイヤになることすらありました。そんな折、田邊先生が『英語教育』(大

修館書店)の「和文英訳演習室」(2003-2009)の講評で使われていた、この“KISS”という言葉に出会いました。講評では、英作文のコツのひとつとして用いられていましたが、それはそのまま小難しいことを、偉そうに上から目線で語っていた当時の自分にズバリ当てはまりました。以来、授業のみならず部活などでも、“KISS”を意識して話したところ、生徒の理解度に大きな変化があったことを鮮明に覚えています。

C先生も一言、述べたいようです。

同感です。ていねいに話をしているようで、実はまったく伝わっていない、「なんでこんな簡単なことがわからないのか」と、全部生徒のせいにしていたバカな自分がいました。そんなとき、研究授業に来られた田邊先生の“KISS”に目が覚めました(笑)。確か、「不定詞 to」と「動名詞-ing」の違いに関するレッスンでしたよね。文法用語(ルール)をこねくり回して、独りよがりの話しをしていた私に、「もっとシンプルに、そして生徒の側に立って話しをするように」とコメントをいただきました。“KISS”はまさに覚醒の言葉でした。

嬉しい発言です。このような“KISS”への目覚めは、教師なら必ずどこかで経験すると思います。A先生が述べているように、事を難しくして話すのはもはや職業病でしょうか。教職人生のどこかで気づくのではと思いますが、実際の多くはそうではないのかも…。というのも、文科省がわざわざ「教師の話し方」というWebサイトを設けているのは、これと決して無縁ではないと思うからです。

3 一時一事

せっかく“KISS”ということをお伝えしたのに、長くなってしまいました(反省!)。次に進めましょう。これも“KISS”に関連しますが、教師があれもこれもと、伝えたいことをてんこ盛りにする傾向があるのはご存知の通りです。これもその人の授業に大きな影響を与えます。かく言う私も新人時代には、先輩から“One thing at a time だぞ!”と何度も注意を受けていました。

B先生に代弁してもらいます。

お隣の小学校の外国語活動に週2日、駆り出されるようになって2年になりました。5、6年生に授業をして、痛感しているのが「一時一事」の大切さです。教師には伝えたいことが山ほどありますが、小学生に、一挙に大量の情報を盛り込むのは御法度。理解度のずば抜けた児童がいたとしても、詰め込んではいけないと改めて反省しています。それは、取り残される子どもの方が圧倒的だからです。

小学校での実践を通して、「ひとつの活動に伝えたいポイントは1つ」と確信するようになりました。それからつけ加えですが、経験とは思議なもので、中学校の授業でも自然に「一時一事」になってきたのです。

教師はモノを知っているので、あれもこれもとやるのですが、児童や生徒が処理できる範囲を超えて、overflowしてしまうような詰め込みは避けるべきです。また、「聞き手に負担がないようにポイントを伝える」というのは、考えるよりも大変な技術を要求されます。初等教育の先生方の授業を参観することの大切さが言われていますが、参観した多くの先生はまさにこの一時一事を学んでくるようです。

4 キル

“KISS”にもうひとつ関係するのが、「キル」です。これは初等教育では「短文主義」と呼ばれ、「長文は避け、できるだけ短く情報を切って伝える」という意味合いで用いられています。

教員の話好きもまた職業病です(必要悪?)。専

門領域についての知識がふんだんにあるため、一文そのものが長くなってしまいう傾向があるのです。そして初心者も簡単にこのトラップに陥ってしまいます。どこかの元総理のように話すことを奨めているわけではありませんが、情報量が過多になると、聞き手を話に集中させることが難しくなります。

再びB先生です。

キルは田邊先生の通訳の授業で教わったことです。これは“kill”ではなく、「切る」が元になっていたと思います。長い英文をその英文のままと同じスパンで(ピリオドも英文に合わせて)訳しても、かえってこなれない日本語になってしまうことがあります。それを避けるために、情報ごとにピリオドを置くつもりで訳してみよう、というのが元々の授業のコツでした。それが今では生徒への話しで役立っているのです。

田邊先生は「耳の構文」という説明をされていましたが、言葉を耳で聞くときに大切なのは、複雑にすることではなく、そのままの流れで情報を送ることです。今ではslash readingでもよく言われるようになりましたが、まさかそれが話し方に絶大な効果をもたらすとは思いませんでした。

私自身、通訳の訳出法が英語教師の話し方に変化をもたらすとは思っていませんでした。「キル」ということは、耳で聞く生徒に知識をスムーズに流すための潤滑油の役割を果たすのです。

5 まとめ

今回は、教師というプロだからこそ陥ってしまいがちな話し方の問題点を、3名の先生方がいかにこなしてきたかの話に終始しました。現在、そんな悩みをお持ちの方は、まず“KISS”から始めてみましょう。きっと何らかの変化が起こるはずですよ。

また、議論では、他にも、「置き換え」(生徒の言葉への置き換え)、「あるある挿入」(生徒のスキーマへの連絡)などがあがってきましたが、これらはまた別の機会にお伝えしたいと思います。今回は声の使い方に特化したお話を予定しています。

【参考文献】
菊池省三(2012).『授業がうまい教師のすごいコミュニケーション術』学陽書房.



観点別評価 — 悩みの根っこ

根岸雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 観点別評価再考

観点別評価が、中学校に導入された頃、この評価の方法についての研修会がかなり頻繁に行われていた。観点別評価については、『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』(国立教育政策研究所教育課程研究センター、2002)が刊行され、その中の第9章が「外国語」であった。この参考資料では、観察による評価がかなり強調されていたために、どのようにして観察評価を行うべきか(その実践方法や、そうして集められた評価資料の総括の方法など)についての説明に、かなりのページが割かれていた。

この観察による評価そのものは、現行学習指導要領とともに配布された、次の『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 外国語)』(国立教育政策研究所教育課程研究センター、2011)では、だいぶトーンダウンした形だ。2011年版の参考資料では、2002年版とは逆に、「評価方法」の欄では、「後日ペーパーテスト」の文言が目立つようになり、そのペーパーテストについても、「教科書とは異なる物語を読むペーパーテストにおいて」という文言にも象徴されているように、かなり具体的に踏み込んだ記述となっている。

観点別評価の導入時に、この観察による評価とともに、当初よく議論されていたのが、ある問題形式によるテスト結果をどの観点として扱うかというものであった。今日では、あまりこのような議論が起ることはなくなったので(そもそも、観点別評価に関する研修の機会が激減したのだが)、良くも悪くも、それぞれの教員あるいは学校の中で、ある一定の形で、落ち着いたということであろう。

今回の原稿では、こうした議論がそもそもなぜ起こったのか、その落ち着き方がはたして本来あるべきものであったのかなどについて考えてみたい。

2. どの観点到に含まれるかの判断

ある問題形式によるテスト問題の結果をどの観点として扱うかという議論の中で、よく話題となったのは次のような問題であった。それは、英語の単語の英英辞典の定義を読んで、その定義を表わしている単語を推察して書くという問題である。

この問題の結果を4観点のどれに入れるかについて、ある講演で中学校の先生方に尋ねたところ、その判断は、「理解の能力」「表現の能力」「言語や文化についての知識・理解」と3つのカテゴリーにきれいに3分の1ずつに分かれた。

それぞれの理由は、

- ・定義を「読んでいる」ので「理解の能力」とする。
- ・単語を「書いている」ので「表現の能力」とする。
- ・「単語」の知識を問うているので「言語や文化についての知識・理解」とする。

というものだった。

今から思えば、単語だけを書かせて、それで「表現の能力」とするというのは、説得力がないようにも思われるかもしれない。しかし、当初は、「単語でも書いているのだから、『表現の能力』である」というような考えを持つ人達も少なくなかったのも事実である。

講演では、私は、このような問題については、「自己表現」に当たる要素が含まれず、また、書かれているのが「単語」だけということもあり、「表現の能力」には当たらないとした。その上で、これが「理

解の能力]を問うているのか、「言語や文化についての知識・理解」を問うているのか、については、その問題によろとしていた。つまり、問われている単語自体は誰でも知っていて、定義の文の理解が問われるような問題であれば、それは「理解の能力」を問うているし(以下の①)、定義の文自体は誰でもある程度読めるようなものであるが、その単語の知識の有無に差があるような問題であれば、それは「言語や文化についての知識・理解」を問うている(以下の②)という具合である。

① the clear liquid without colour, smell, or taste that falls as rain and that is used for drinking, washing etc

答え: water

② 12 o'clock at night

答え: midnight

(定義は①②ともに Longman Dictionary of Contemporary English 5th Edition による)

このような議論は、他の問題形式についても起こった。並べ換え問題では、「表現の能力」として扱うか、「言語や文化についての知識・理解」として扱うかの議論があった。与えられた語句をもとに作文をしていると考えれば、「表現の能力」を見ていることになるし、文構造の知識を見ていると考えれば、「言語や文化についての知識・理解」を見ていることになる。

総合問題の場合は、英文の理解を問う問題がほとんど入っていないにもかかわらず、英文が出ているというだけで「理解の能力」を問うているとしているケースが多々あった。しかし、これに対しても、英文は単なる素材であり、見ているのは文法の知識であったり、語彙の知識であったりであるから、その問題の結果は「言語や文化についての知識・理解」として扱うべきである、とする人達も当然いた。

3. 問題の本質

観点の判断は、解答の中心となる知識・技能によるとする私の判断自体は、今でもあまり変わっていないが、あるときから、この問題の本質は何だろうかとか考えるようになった。教師がこのような悩みを持つのはなぜか。その理由は、これまでと同じよう

なテストを行いながら、それぞれの問題の結果が4観点のどこに行くかと考えてしまうことにあるのではない。

本来は、手順が逆だ。つまり、まず指導目標と到達目標を決めて、その目標への到達の有無を見るためにはどうしたらいいかを考えるべきなのだ。評価方法を「テストによる」としたら、まずはどのようなテスト問題が最適かを考えるのである。「表現の能力」なら、その「表現の能力」を見るには、どのような問題がいいかを考える。「言語や文化についての知識・理解」なら、その「言語や文化についての知識・理解」を見るには、どのような問題がいいかを考えるべきなのだ。

テストありきの 観点別評価の手順	評価規準に基づく 観点別評価の手順 (テストを選択した場合)
(教科書の)指導 ↓ (従来型の) <u>テスト問題の作成</u> ↓ 問題ごとの 評価観点の決定	到達目標の設定 ↓ 評価規準の作成 ↓ 評価方法の決定 (テストを選択) ↓ テスト方法の決定 ↓ <u>テスト問題の作成</u>

こう考えれば、観点別評価のためのテスト問題の作成手順は当然異ってくる。上の右表のように作れば、「表現の能力」を見る問題は、「表現の能力」を見るのに相応しい問題になるであろうし、「言語や文化についての知識・理解」を見る問題は、「言語や文化についての知識・理解」を見るのに相応しい問題になるであろう。あえて、観点と観点の境界線上の問題を選んで出す必要などないのだ。

観点別評価が導入されて10年以上たった。良くも悪くも落ち着き、観点で悩むことはなくなったかもしれない。しかし、テストは昔と変わっておらず、観点別評価に対応する構成になっていないような場合も少なくない。今一度、「評価規準」に基づくテスト方法の見直しをしてみてもどうか。

コミュニケーション力を高める 英語の授業(1)

一どのように授業の中に プロジェクト活動を取り組んでいくのか

林 秀樹 Hayashi Hideki (滋賀大学教育学部附属中学校)

1. プロジェクトの設定の仕方

どこに着くか分からない船で、何の航行予定も持っていない船長と航海に行きたいと思われませんか。ミステリーツアーのようでもおもしろいと思われるかもしれませんが、遭難する危険性があります。

「自分の授業が終わったときに、生徒はどんな表情をしているだろうか」とよく考えます。『CAN-DO リスト』の作成や到達目標を設定していくことが大切だということは当然となりつつあります。今日はこれ明日はこれ、とその日暮らしの授業では生徒の力もつきません。教えている教師もいつも迷いながら、その日の授業をこなしていくだけになってしまいます。「つきたい力」を目標にプロジェクト設定することで、自分の授業に一本の筋が通っていきます。

そのポイントを以下に紹介します。

(1) 年間指導計画の最後の目標の確認

様々な言語活動のプロジェクトはどこに向かっていくのか。その最終ゴールを見失わないようにすることが大切です。そのためには最終ゴールからスタートに向かっていくような「逆算の発想」で考えていくとうまくいきます。

(2) 4 技能の統合

「話す」「聞く」「読む」「書く」の4つの技能のうちいくつかを統合した活動にします。この目的は、活動のやりっ放しを防ぐためです。「自分の町について書きなさい」では書くだけになってしまいます。でも、「自分の町について読んだ人が行きたいと思えるように書きなさい」になると、相手を意識して書くようになり、これがコミュニケーションの必然性を生み出します。相手を書いたものを読んだり、相手が話した内容を聞いて、それを話題に話したり、活動の中に人のつながりが生まれていきます。

(3) 「言語材料を使ってどんなことができるのか」の発想

例えば、「have (has) + 過去分詞」の形で「～したことがある」という経験の意味の現在完了を教える時に、生徒に今まで経験したことがあることを3つ書かせましょう。「どう教えようか。」「どうすればわかりやすく説明できるか」などの発想ではなく、現在完了は、「どんなときに使ってどんなことを伝えることができるのか」を考えさせます。現在完了の定義は「今までにあった過去の出来事と今のつながりを伝える」ことです。ではそれをもとにどんな内容を話せるかを生徒達は考えます。すると、「今まで経験したことはないけれども、どうしても挑戦したいことについて、現在完了を使い、友達に伝えよう」といったような発想が生まれてきます。

(4) Time on Task or Task on Time?

何時間で終わらせるためには、どんな活動ができるかを考えてばかりいると、教科書を終わらせることが目的になります。「この活動をするためには何時間必要なか」を考えます。

(5) 「遊び心」を忘れない

生徒にこれだけのことはしっかり教えておかなければ、と身構えたとおもしろい発想は生まれてきません。生徒がまず「おもしろそう」と興味を持つことを考えます。生徒が楽しそうに活動している姿を想像しながら考えると、アイデアも生まれます。

2. 実践事例

ここでは、いくつかの具体的なプロジェクトを紹介しながらどのようにプロジェクトを設定していくかを紹介します。

(1) プロジェクトの基本的な設定の仕方

《カットアウトピクチャーで自分の町をプレゼン》

活動

- ・あなたの町や観光名所を紹介する文を書く。
- ・A4一枚に絵4つと英文でまとめる。
- ・それぞれの絵に英文は4文以上書く。
- ・発表は絵だけを見て、発表する。

技能 「話す」「聞く」「書く」

言語材料

- ・There is / are…「～が〇〇にある」という表現で、知らない人に自分の町にあるものを伝え、その後詳しい説明を行う。
- ・助動詞…「～できる」「～するだろう」「～したほうがよい」等助動詞を使って、相手がその町に行きたくなくなるようなおすすめのポイントを伝える。

時間 原稿作り(1時間)、交流と練習(1時間)、発表とまとめ(1時間)…計3時間*

※3時間も余分はない場合もあるでしょう。しかし、それは教科書の進捗と別の3時間と考えずに、この活動をするために各時間で何ができるだろうと考えます。

進め方は、この単元では最後にこのプロジェクトがあることを最初に示します。そして、教科書や文法の基礎的な事項を教える各1時間の中にこの活動を組み入れていきます。各時間で、一つの絵とその説明文を書かせます。すると次の時間には前回書いた文と絵を使って生徒同士で交流の時間を持たせることもできます。また、その次の時間には2つの絵と文とで交流します。この活動をくりかえすと、練習も複数回できるし、交流することによって他の人のよいところに気づき、自分の文の見直しもできます。3時間終わった後には、練習と見直しもできています。最初にプロジェクトを設定しておく、授業と授業のつながりが生まれます。

そして、最も大事なポイントは何を「つけたい力」として設定しておくかです。

(ア) 聞いた人が興味を持ってもらえるような英文を書くことができる

(イ) 絵を見ながら自分の使える表現を使って、描写できる

(ウ) 相手が興味を持ってもらえるようなプレゼンができる

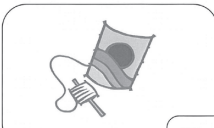

(エ) 相手のプレゼンに興味を持って聞くことがで

きる



しかし、「(ア) 聞いた人が興味を持ってもらえるような英文を書くことができる」とはどのような状態を表しているのか、生徒には具体的なイメージを持つことができません。そこで、生徒達には「聞いてもらった人から3つ以上のコメントや質問をもらってくる」と指示します。コメントや質問の例は「I want to go there someday. / Oh, I didn't know that.」があります。これにより、つけたい力(エ)とのつながりが生まれ、聞いている側も主体的に相手の話に耳を傾けるようになります。このような活動を続けると、ただ書いたり発表したりするのではなく、伝える相手を意識して活動に取り組むようになります。大切なことは、単に「4文書きましょう」ではなく、「何の目的で、だれに対して書くのか」をはっきりさせて活動を作ることです。

もう1つのポイントは、本番の発表の時は、絵だけを見てプレゼンをさせることです。絵を見ながらプレゼンをすることで自分の力で英語をReproductionしていく力の基礎を養うことができるのです。

カットアウトピクチャーに挑戦しよう

Higashi omi

I live in Higashi-ohmi city.
There are some museums there.
One of them is a kite museum.
There are many kites in the museum.
Higashi-ohmi is famous for a very big kite.
It is as large as 100 tatamis.
There are some cake shops near my house.
One of them is very famous.
Do you know Taneya?
I buy birthday cakes for my children on their birthdays.
They are delicious. You must like them.
There are also good restaurants near my house.
My favorite restaurant is Umiza.
It is a sushi restaurant.
I like its lunch set very much because we can enjoy tempura, udon, and sushi.
If you come to Higashi omi city in the summer or the fall, you must go to eigenigi.
You'll enjoy beautiful scenes and swim in the river.
You'll also see colored leaves in the fall.

カットアウトピクチャー

- ・あなたが住んでいるところの観光名所やお祭りを紹介する文を書きましょう。
- ・A4一枚に絵4つと英文でまとめましょう。手書きでもワードで作ってもよい。
- ・それぞれの絵に英文は4文以上。
- ・発表は絵だけを見て、発表する。

(2) Vision を明確に

《トライアングルチャットで3人が協力して会話を続ける》

活動 3人一組で、2分間会話を続ける。話す話題は自由。だれと組むかは当日抽選。

言語材料 既習の表現全般

評価 評価は5段階

- ① 会話に積極的に参加しているか
- ② 英語の正確さ
- ③ 3人で会話を楽しもうとしているか

生徒にとってチャレンジングなものであり、ある程度の期間練習が必要なプロジェクトを行うときに特に大切になってくるのが、見通しを教師だけでなく、生徒に持たせることです。この活動では3人で会話を続けるために、会話を発展させていく練習をペアで行わせ、その練習計画を立てさせました。

○ ペア活動の計画を立てよう。必ず鉛筆で書くこと。

回	進捗度	何をするか	回	進捗度	何をするか
1			6		
2			7		
3			8		
4			9		
5			10		

練習は授業の導入の帯活動として行います。練習の中で生徒達自身が自分の課題に気づいていきます。課題の克服に向けて何が必要かを考え、それを練習で実践してみる。そして、ふりかえる。また、実行を試みる。PDCAのサイクルを組み込み、少しずつ生徒の成長と変容を仕組んでいくこともプロジェクトの大切な面です。

そしてその生徒達の活動の中でよい方法で実践している例があれば、授業の中で取り上げて発表したり、プリントなどでまとめて共有していくと、活動のレベルが上がっていきます。

(3) 活動の形態の工夫

《Jeopardy でクイズ大会》

活動 各グループ8問のクイズを作る。1人2問どの問題を出すか決めておく。

問題の種類

- ① True or False 形式
- ② 選択形式：Which, Who ～?
- ③ 答えを言う：What, Which, Who ～?

Culture& history	People	Science&Geography	Creation
(あ)	(あ)	(あ)	(あ)
(い)	(い)	(い)	(い)

言語材料 比較級の表現

このプロジェクトでは、グループ対抗のクイズ大会を行います。グループにすることで競争心が芽生え、クイズは盛り上がります。プロジェクトを設定したときに、個人、ペア、グループ、クラス全体で行う方がよいのか、活動の形態も重要です。常にペア活動ではなく、プロジェクトによりどの形態がよいのか柔軟に考えます。

3. 自分の授業の中で

最後に、私が実際の授業でプロジェクトを行った後の生徒の自己評価と授業評価のワークシートを紹介します。

Program 8 の目標

評価(5段階)

- 後置修飾の使い方を理解して、ノートやプリントにオリジナルの英文などを使ってまとめることができた。 1 2 3 4 5
- 後置修飾を含んだ本文の意味を英語と日本語の語順の違いを理解しながら読むことができた。 1 2 3 4 5
- 「自分の英英辞書」を作り、工夫して英文をつくることができた。 1 2 3 4 5
- 「今まで～した一番〇な〇」という話題で話したり、英語でまとめることができた。 1 2 3 4 5

Program 8 を終えて自分で評価できること

Program 8 を終えて、見つかった自分の課題と今後がんばりたいところ

授業評価

このワークシートをプロジェクトの最初に生徒に配布し、プロジェクトを終えた後に書き込んでもらいます。つまり、これを最初に配布することで、生徒と教師が同じ地図を持って同じ方向に進んでいくことになるのです。

本稿では、私がプロジェクトを設定しているときのポイントについて紹介しました。次回は、教科書の本文と関連したプロジェクトを紹介したいと思います。

Just Now

外国語活動の時間は ハッピータイム —6年間で培う城南小学校 の実践

常本 公志 Tsunemoto Kimiyuki
(群馬県高崎市立城南小学校)

1. はじめに

本校は、平成13年度より1年生から6年生まで週1時間の“英語活動”を行う教育活動を推進してきました。平成21年度からは、教育課程特例校として、“外国語活動”を教育活動の中心に据えています。筆者は、平成18年度から平成22年度までは行政の立場で、平成23年度からは本校教頭の立場でかかわらせていただいています。諸先輩方が築き上げてきた本校の教育活動について、僭越ですが本稿を拝借して筆者が代表して述べさせていただくとともに、この稿がお読みいただく方々のご参考になれば幸いです。

外国語活動を通じた本校の教育活動の目的は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」であり、以下が本校のめざす児童像となります。

- 進んで外国語を聞いたり話したりして活動を楽しんでいる子
- 親しんだ外国語表現を活用して、進んでコミュニケーション活動に取り組んでいる子
- 外国語や外国のことに興味をもち、進んで理解しようとしている子

2. 指導計画

本校では、独自の年間指導計画に毎年少しずつ修正を加えながら、1年生から週1時間の外国語活動を進めています。これは、*Hi, friends!*などの教材を全面的に導入するには、従来からの単元配列や指導計画を大幅に変更する必要が生じるからです。ただし、*Hi, friends!*と同様の単元は、各学年に配列してあります。

また、低・中・高の学年ブロックで同じトピック

を単元配列しています。これにより、児童はスパイラルにトピックに触れることができ、「知っている。やったことがある。」という気持ちをもって、安心して活動に取り組むことができます。

例えば、1年生や2年生において、グループで家族となり、自己紹介しながら、家族を紹介するという活動に取り組みます。このとき1年生と2年生では、使用する英語表現に差を付け、2年生では1年生の時に使用した表現に自分の好きなものについての表現を加えるなどの工夫をしています。

また、毎年10月には市内のALT約20数名を招いた活動を行っています。このときの単元は1年生から5年生まで同じ「Let's make friends」というトピックです。

空間的な広がりとしては、3年生では「My Town」という単元で校区の地域に、4年生では「My City」という単元で本校がある高崎市に、5・6年生では「World Time」という単元で世界に目を向けたトピックを設定しています。

3. 指導体制

本校の指導体制は、学級担任(HRT)、日本人外国語活動担当(JTE)、外国語指導助手(ALT)の3名です。ALTとの打合せの時間の確保のため、本校の工夫は学年ごとに打合せの日を週2日設け、次回の活動内容の確認をしているところです。これにより、3者のチーム・ティーチングがよりスムーズに進んでいます。

打合せの進行は、JTEが行っています。授業中のHRTやJTEの指導分担は、単元によってフレキシブルに変えています。

4. 環境づくり

本校では、外国語活動の日常化として、以下のよう工夫を行っています。

(1) 外国語活動室 (Happy Room)

外国語活動を行う部屋を1室割り当て、室内に授業に必要なピクチャーを貼ったり、教材を保管したりしています。

また、現在のALTがイギリス出身のため、イギリスに関連した作品を壁面に飾ってあります。



(2) 児童放送委員による英語の校内放送

朝、中休み、給食、帰りの放送時に、児童放送委員が日本語に加え、英語アナウンスも行っています。

(3) Weekly English

毎週「一口英語」をハッピータイムの冒頭に取り上げ、全クラス口ずさんでいます。「一口英語」の内容は、行事や季節に合うものをJTEが考えます。

また、教室や廊下にも掲示して、児童の目に触れるようにします。

(4) 全校集会時の外国語活動

年間3回朝行事の中に「国際理解集会」として、全校で遊べる外国語活動のゲームをします。内容は、下学年と上学年の2学年の児童が中心となり、考えて提案したものです。

また、年1回「ハッピーフェスティバル」と銘打ち、各学年で活動を発表する集会を行っています。これは、保護者にも公開し、毎年大勢の保護者が参観しています。

(5) 校舎内外の表示

児童玄関のおもてには、「WELCOME TO JONAN」の文字が貼り付けてあります。各部屋の前や廊下にも英語による表示がされています。例え

ば、「No running.」の表示が廊下にされているので、児童たちは、走る子を見かけると「No running!」と注意をすることができます。

5. 保護者の理解を得るための活動

(1) Happy Time News の発行

毎月1回、外国語活動の授業の様子をおたよりにして発行し、保護者に配布しています。

(2) 全校集会時の外国語活動の公開

前項の(4)を参照。

(3) 学校ホームページ (HP) での発信

HPにWeekly EnglishやHappy Time Newsを掲載し、外国語活動を周知しています。

6. 卒業生のその後

今年度、本校で外国語活動を経験した卒業生(中1～23歳)にアンケートを実施し、活動のその後への影響を調査しました。抜粋して紹介します。

「外国語(英語)活動が楽しかった」を回答した卒業生は9割を超えていました。

(1) 中学校以降の英語学習に役だったと思う活動

最も多かったものは「英語そのものへの慣れ」で、次は「英語の聞き取り」でした。

(2) 中学校以降の英語学習に対する気持ち

「積極的に」「まあまあ」を合わせた取り組み方は、8割を超えています。

(3) 他の小学校卒業生との比較

他の小学校の卒業生も進学する中学校にも協力していただき、調査しました。その中で、本校出身者の回答が顕著だった項目の1つに「小学校1年生から週1時間英語の授業があったほうがよい」があげられます。

7. おわりに

毎年、職員や児童の入れ替わりがある中で、学校評価のアンケートでは、約95%の児童がHappy Timeの授業を「好き」と答えています。今後よりコミュニケーション能力の素地を養う授業改善、単元開発を行っていききたいと思います。

Situation Critical: A Native English Teachers' Role in Motivating Troubled Students

James Hershman

(Former AET at Higashiosaka City Nisshin HS, Current NET at Osaka Prefecture Ikuno HS)

My first week as an English teacher in a Japanese middle school completely changed my conceptions about Japanese students. While preparing for my very first lesson, 13 broom-wielding 3rd year boys barged into the staff room and began attacking teachers. It was a group of students who had formed a kind of gang and they had become unglued over having been disciplined for breaking school rules. My unfounded belief that all Japanese students were studious and mannerly was shattered in an instant.

As I later learned, quite a few of the students at my school lived in an orphanage and many others were living in broken or abusive homes. Many of these kids were in serious crisis. How could I teach English to children that were living their lives under such tragic circumstances and who also viewed English as wholly irrelevant to their lives? Furthermore, how could a newcomer like me connect with these troubled students while navigating the barriers of language and culture? Over the next few months I had to learn to empathize with their situations. Once I was able to do that, coming up with a teaching strategy became much easier.

My first attempt at motivating the students started between and after classes, outside of the rigid structure of their lessons. I asked them questions about their favorite bands, manga and TV programs in very broken Japanese. I used my hobby, playing the guitar, as a way to earn some "cool" points with the students by teaching them chords so that they could strum along to some of their favorite songs. They enjoyed these interactions and although very little English was used at first, they began to view me as a fun person that they could relate to. Using their natural curiosity of foreigners and being open with my students in these "hallway moments" built the trust and respect that I could use to my advantage later in the

classroom setting.

The next step was learning to recognize the strengths and limitations of my students, not necessarily in regards to English ability but rather in more basic terms such as the ability to focus and follow directions. Then, I decided to give some classroom responsibilities to the least motivated students like passing out and collecting prints or organizing the students into groups for games and group work. This gave me an opportunity to praise them because I gave them tasks that they could easily perform. The more responsibility and praise they received for accomplishing these tasks, the better behaved they became during my classes.

Over time, the hallway chats became livelier and the students also became more receptive to learning English. After a while, I started to hear students address each other as they passed in the hallways using the common American English greeting of "What's up?" and the typical response of "Not much." These were small but very rewarding victories. Perhaps my students would never be truly proficient at English, but for these students, English proficiency wasn't a realistic goal. Eventually, they saw me as someone they could trust and someone who was actually interested in them as people regardless of their ability as students. Though, every situation is different, with a bit of empathy and a little effort to get to know your students outside of the classroom it is sometimes possible to make a real difference.

At the end of my first school year my efforts were rewarded. The same group of broom-wielding students came up to me after their graduation ceremony. With tears in their eyes they had come to thank me and that was more than enough for me.



私が留学していた時、大切にしていたものベスト3の中に、辞書がありました。辞書は英語で生活を送るにあたって必要不可欠なものでした。思えば中学生の頃に初級者用の辞書を買ひ、授業で引き方を教えてもらってから、高校でも大学でも辞書は必ず鞆の中に入っているほど身近なものでした。

現在では、教科書巻末の「単語の索引(日本語訳付き)」で事足りると考える中学生がいることは確かです。そんな彼らに、辞書を身近に感じ、自主的に辞書を使うきっかけを与えることのできる活動の1つに「早引き競争」があります。

とりわけ中学1年生に対して、辞書に親しませるという目的においてこの活動は有効です。

私が勤務する中学校では、クラス全員分の英和・和英辞書を所有しています。それを全員に配布し、班で協力して単語を調べます。班の中で順番を決めて、調べた答えを1人1問ずつ黒板に書き出すのです。速く正確に答えを書いた班にポイントを与える、という単純な活動ですが、生徒は熱中します。以下が問題の例です。

- ①「see」と「look」の違いを調べなさい。その違いがわかる例文を1つ書きなさい。
- ②「the first floor」の英国での意味は。
- ③「トイレ」の英語での言い方を3つ答えなさい。

①は「見る」という同じ日本語に訳される言葉でも、英語ではニュアンスが違うということに気づかせる問題です。用例を活用することで、その単語のそれぞれの使い方を学ぶことができます。②は英国と米国では、意味に違いがあることを知ってもらうための問題です。[米]1階、[英]2階となり、生徒は文化の違いに触れ、言葉との密接な関係に気づく機会になります。また first で調べるのか floor で調べるのか、という疑問も出て、班の中で相談しな

がら解決していくことができます。③では、日本語の「トイレ」に当たる言葉が英語ではたくさんあり、時と場合とで使い分けなければいけないことを伝えることができます。辞書には語の説明と共に用例が載っているので、どのような状況でどの語を使うべきかが容易に判断できます。またこの問題は和英辞書で調べると簡単です。生徒が、英和と和英の2つの辞書をどう使い分ければいいのかを検討する良い機会にもなります。

このように、説明したいことを組み込んだ問題をゲーム形式で出題し、生徒が答えを探す過程でその意図に気づかせる、という「しかけ」を提供できるのが「早引き競争」の醍醐味です。意味だけでなく、発音、品詞に関する出題をすることもできます。

「早引き競争」は辞書の使い方を知ることが目的でしたが、学年が上がると辞書を手段にした活動が多くなります。「公開ブレインストーミング」は、リーディング前に2人1組でこれから読む文のテーマやタイトルから連想される英単語を、制限時間内にできるだけたくさん黒板に書き出すという活動です。2人に1冊だけ辞書を渡し、1人は辞書担当、もう1人は単語を書く担当とします。この活動には、情報を共有することでテーマに関する語彙や背景知識を増やすというねらいがあります。発想力豊かな生徒たちの選ぶ英単語を知ること、教室内は楽しく盛り上がりやすくなります。黒板の英単語を全員で品詞ごとに分類する作業をすることもできます。

学習指導要領には「生徒が適宜辞書を繰り返し使用し、調べたい単語を辞書を使って自由に調べるといことを普段から行わせる必要がある」と述べられています。ゲーム形式の活動を通して辞書を身近に感じてもらうことで、授業でも家庭でも辞書を手段にして学習できる自立した生徒を育てていきたいと考えています。